

先進校に学ぶキャリア教育の実践 CASE 2

三重・県立 **紀南高校**

統廃合の危機を乗り越え
地域と取り組むキャリア教育

取材・文／藤崎雅子



≫実践ノウハウ

- 2年次選択科目に1年間のインターンシップを設定
- 小中学校と連携し12年間の系統的キャリア教育を目指す
- 学校通信やマスコミを通じて地域へ情報発信

三重県立紀南高校は入学定員120人と比較的小さな、単位制の普通科高校だ。三重県南部の交通の便がよいとは言えない地域で、地元の幅広い層の生徒が集う。卒業後の進路も、就職が約6割と最多だが、大学や専門学校など多岐にわたっている。

周辺では少子化や過疎化に対応して県立高校の統廃合が進むなか、同校は小規模ながら存続。高校で全国3番目となる「学校運営協議会を設置する学校(コミュニティ・スクール)」の指定を受け、地域と共に学校活性化に取り組んでいる。キャリア教育においては近隣の小中学校をリードする存在だ。

1年間のインターンシップや
小中高連携を推進

同校のキャリア教育の主だった取り組みは、図1のようなものがあげられる。「総合的な学習の時間」を中心として展開されており、全体指導では外部講師を招いた講話や説明会が充実。また、個人面談のほか、他校を参考に作成した目標管理・行動記録ノート「KOMAME」の活用など、個別指導の体制も整えている。

なかでも今回特に注目したい取り組みが、2学年のインターンシップだ。希望者対象だが、科目「就労体験」という授業として1年間、週1日のインターンシップを実施し、単位認定もなされる。インターンシップ先との連携により、生徒はコ

ミュニケーションの大切さを学んだり、将来働くとはどういうことなのかを知るなどの効果が出ている。

もうひとつ、近隣の小中学校を巻き込んで12年間の系統的なキャリア教育の構築を目指している点にも注目したい。同校が近隣の小中学校に呼びかけ「南牟婁郡キャリア教育推進企画会議」が発足。学校間で連携した新しい取り組みや、共同での研究・検討が進められている。

こうした活動の土台にあるのは、地域との良好な関係だ。コミュニティ・スクールとして地域に対し意見や協力を求めるだけでなく、地域に対する理解の深まりが、学校の枠を超えた様々な活動をやりやすくし、実践効果を高めている。

図1 キャリア教育の主な取り組み

全年次	進路講話(学年別、進路希望別)／進路個別面談／進路補講／「ちりつも」学習(SHRを活用して毎日プリントに取り組む)
1年次	進路研究／業者による進学説明会／林業・農業体験／地元企業見学／キャリアデザインサポート(外部講師による進路希望指導)
2年次	希望者による1年間のインターンシップおよび発表会／外部講師による進路ガイダンス／企業・大学見学(修学旅行時)／個人面談／作文指導
3年次	【進路決定対策】キャリアアップセミナー就職直前対策／3学年全生徒に対する小論文指導／進路面接指導／卒業生と語る会／「KOMAME」学習(目標管理と毎日の行動・気づきの記録をつけて担当教員に提出しアドバイスを得る)
	【進路決定後の指導】働くための基礎講座(講師:三重県生活文化部)／外部講師によるアフターフォローガイダンス「社会人としての心構え」／防犯セミナー／県議会議長講話「社会人と政治について」
その他	コミュニティ・スクールとの連携／卒業生への追指導(就職先・進学先訪問)

>> School Data

普通科(単位制) / 1962年創立
 生徒数 / 323人(男子159人・女子164人)
 進路状況(2008年度実績) / 大学 11.5%・短大 1.1%・
 専門学校等 22.9%・就職 58.6%・その他 5.7%
 三重県南牟婁郡御浜町阿田和1960
 TEL 05979-2-1351
 URL http://www.mie-c.ed.jp/hkinan/

Process
 立ち上げのプロセス

地域に支えられ
 学校存続の道を模索

同校のキャリア教育推進をはじめとする学校改革の足跡を、およそ10年前から追ってみたい。様々な研究指定に積極的に手を挙げ、制度を有効活用しながら前進を図ってきた経緯は図2のとおりだ。

90年代後半の三重県は、少子化をにらんだ県立高校再編の動きが活発化していた。同校でも入学者の定員割れが始まった時期。危機感から7つのプロジェクトチームが立ち上げられ、「学校外における学習活動」「単位制導入」「地域に開かれた学校づくり」などのテーマが検討された。

長期インターンシップは、そのひとつ「学校外における学習活動」プロジェクトから生まれた。2000年度より科目「就労体験」を設定し、半年間のインターンシップを開始。立ち上げ時の不安の大きさを、進路指導部の谷口久治先生は振り返る。

「最大の懸念は、半年間も職場に受け入れてもらえるか。トラブルを避けるために地域の商工会議所商工会やハローワークに断りを入れたうえで、1件ずつ訪問して趣旨を説明しました。すると、最終的にはほとんどが快諾。私たちは実行に向けて大きな勇気をもらいました」

図2 近年の紀南高校の動向

年度	学校全体	キャリア教育関連
1998年度頃～	○7つのプロジェクトチームで学校改革を模索	
1999		○文部省(当時)より「学校外における学習の成果の単位認定を取り入れた教育活動のあり方」を主題とした研究指定
2000	○単位制導入	○半年間のインターンシップを開始
2003	○募集定員5クラスが3クラスに減少	
2004	○「紀南地域高等学校再編活性化推進協議会」を設置 紀南地区の本所高校と紀南高校のあり方について議論	
2005	○文科省よりコミュニティ・スクール研究指定。地域と連携した「コミュニティ・スクール推進委員会」と、その下に校内組織「コミュニティ・スクール委員会」を設置	○県教委よりキャリア教育総合推進事業「長期的なインターンシップ」指定 ○インターンシップを1年間に延長
2007	○県教委よりコミュニティ・スクールに指定 ○教育課程を見直し進学体制を強化 ○教育ボランティアと聴講生が授業参加	○県教委より「学校・地域との協働によるキャリア教育実践事業」の指定。「南牟婁郡キャリア教育推進企画会議」を発足させ、小中高連携始まる
2008		○「KOMAME」運用開始 ○キャリア教育優良学校等文部科学大臣表彰受賞

05年度からは、当時注目され始めた日本版デュアルシステムに刺激を受け、実習期間を1年間に延長。現在の形態となった。

一方、こうした間にも、生徒数の減少に歯止めがかからない状況は続いており、同校の今後について地域との話し合いの場がもたれるようになっていた。そこであがったのは「紀南高校をなくしたくない」「地元の子を地元で育てたい」……という

図3 コミュニティ・スクールとしての活動内容(08年度の例)

- ◆ **学校運営協議会の設置**
 地域代表、保護者代表、同窓会代表、学識経験者、学校長、教諭 15人以内
- ◆ **学校運営協議会の開催(年6回)**
 - 学校運営の基本方針の協議・承認や学校自己点検・自己評価の結果共有
 - 学校の取り組み説明や生徒の様子などその都度近況を情報交換
- ◆ **教職員と協議会委員で構成する3部会(地域連携・進路支援・企画広報)の開催**
 全教職員により校内コミュニティ・スクール推進委員会を構成し、それぞれが支援員としていずれかの部会に登録し、その活動をサポート
- ◆ **学校の行事・教育活動への参加・協力**
 - 地域との活動(小中高地域合同清掃活動、土手草刈りなどに委員が参加)
 - 教育ボランティア(地域住民が週8時間の授業に参加)の人選
 - 聴講生制度の実施
 - 各種授業への協力 etc...

声。かつて同校が地域住民の強い要望により開校した経緯や、同校の担う役割についての再確認がなされた。2年間の研究期間を経て、07年度に県教育委員会よりコミュニティ・スクールの指定を受。学校運営協議会「を設立し、地域や保護者が学校運営にかかわっていく仕組みが作られた(図3)。学校運営協議会の支援について教頭の堀昌弘先生はこう話す。



進路指導部
谷口久治先生



進路指導主事
池上 亮先生



教頭
堀 昌弘先生



校長
的場敏尚先生

「地域に学校を開くことで厳しいご意見をいただく覚悟も必要でしょうが、実際の委員の方は学校の方針や活動を応援するスタンスで、強力なサポーターを得たようなもの。学校をよくしたいという熱意のある皆さんと直接話し合うことで、私たちもエネルギーをいただいています」

こうした地域連携を、キャリア教育のノウハウをもってさらに二歩進めようと、近隣の小中学校との連携にも着手。同校の呼びかけで小中高5校による「南牟婁郡キャリア教育推進企画会議」を立ち上げた。定期的に話し合いの場をもち、一歩ずつ連携を強めているところだ。

Close up ① インターンシップ

働く意識を高める
事前指導を重視

現在、インターンシップは2年次の希望者を対象に、教科「総合」、科目「就労体験」(6単位)として1年間、毎週金曜日に9時から16時まで(標準)実施されている。進学・就職の進路希望にかかわらず参加しており、今年度は2年次生徒数の半数近い46人が取り組む。

校内には校長、教頭、事務長、そして科目「就労体験」の授業担当教員8人によりインターンシップ委員会が組織され、受け入れ先開拓や先方との調整などの業務を行っている。保育所幼稚園、販売店、美容院など、毎回30以上の事業所

図4 インターンシップ体験先(2009年度前期)

体験先業種	体験先数	体験生徒数
介護	1	4
保育所・幼稚園	7	11
販売	8	13
美容	8	8
製造(菓子・パン)	3	4
サービス	4	6

図5 インターンシップ日誌

インターンシップ学習日誌

目標 自分らしく行動する。

日時	平成 21 年 5 月 1 日 (金)	天気	晴
8:00	おもち	13:00	一休
9:00	～帰りに遊ぶ	14:00	おかけ
10:00		15:00	メモ・日記を書く
11:00		16:00	
12:00	給食	17:00	

1日の反省や感じたこと
 ① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

自己評価 (該当する欄に○印を付ける)

項目	大変良かった	良かった	やや悪かった	悪かった
出勤時間	○			
あいさつ	○			
言葉遣い	○			
作業態度	○			

御担当者 講評 (お気づきの点がありましたらお願いします)

本日は、お忙しい中、ご協力いただき、誠にありがとうございました。また、お忙しい中、ご協力いただき、誠にありがとうございました。また、お忙しい中、ご協力いただき、誠にありがとうございました。

御担当者より
 7月1日の提出を忘れずにしてください。

担当教員 印

図6 インターンシップ評価表

施設実習 評価表

施設名	施設長名	指導者名	実習生名	年 組	番 名	前	印
評価	評価項目	評価の着眼点	評価				
	1.実習状態	真剣な態度で意欲的に取り組んだ。規則を守り、礼儀正しかった。指示を理解し、行動することができた。	A・B・C・D				
	2.人格的資質	感情(情緒)が安定していた。自主性が見られた。責任感が強く積極的に取り組んだ。協調性があり、公平であった。	A・B・C・D				
	3.実習態度	ふさわしい服装で実習することができた。忘れ物がなかった。	A・B・C・D				
総合評価	A:よくできた B:できた C:もう少し努力が必要 D:かなり努力が必要		A・B・C・D				
所見							

提出して激励やアドバイスをもらう(図5)。1年間の実習終了後は、体験レポートを新聞や



保育園インターンシップで、生徒は子どもと遊ぶにも経験とスキルがいることを知る

通える範囲にある職場の職種・業種は限られるため、インターンシップ先と卒業後の進路の関連はそれほど高くない。しかし、働くことへの意欲や進路意識への影響の大きさが、生徒アンケートの結果からうかがえる(図7)。インターンシップをやってみて「しんどいだけだった」というマイナス回答はごくわずか。「しんどいがよい体験だった」「楽しかった」が多数を占める。また、インターンシップで得たものについての質問には70%の参加者が「責任感・自主性・積極性が少しは身についた」、40%が「働くことに少しは自信がついた」と答えている。1年間取り組みむことで、短期間では

1年間の取り組みで働く楽しさ、大変さも知る

パワーポイントの形にまとめ、科目履修した2年次生と次年度に履修予定の1年次生を集めて発表会を開催している。また、近隣の阿田和中学校でも発表を行い、中学生の職場体験の事前学習として役立ててもらっている。

単位認定のため、出席状況「インターンシップ日誌」、事前の作文や事後レポート等のほか、職場での意欲・態度などをもとに評価が行われる。各職場にも評価表を渡し、生徒の実習に対する意欲や態度について4段階評価やコメントをもらう(図6)。谷口先生は「これまでの10年間で不認定が2人」と口悔しそうに話すが、他の教科・科目に比べれば不認定者数は格段に少ないという。

REPORT

保育インターンシップを終えて

インターンシップを体験して、子どもたちと話すことや一緒に遊ぶことができて楽しかったです。外では鬼ごっこをして遊んだり、ホールでは積み木を使って遊んだりしました。

また、子どもたちと一緒に作業をしました。三角ぼうしに紙をはる作業で、楽しみながらはることができました。しかし、自分がなかなか積極的になれず、子どもたちがけんかをしてしまった時、どのように対処すればいいのか悩みました。ですが、先生方からアドバイスをいただいて、自分で考えて行動することができるようになりました。子どもたちと接しているうちに、気持ちや態度に変化が現れて、自分が成長することができたと思いました。働くことについて、体験前は大変なことかと思っていませんでしたが、体験後は辛い時もあれば、うれしい時もあり、それを感じながら一生懸命働くことなのだと思います。そして、今日できなかったことを次も頑張ろうと思う心や、自分から進んであいさつをしてコミュニケーションをすることを学びました。

自分自身の進路について考えたことは、進路は就職と決まっていたのですが、あんまりはっきりと決まっていますが、人とかかわるような仕事をしてみたいと思いました。

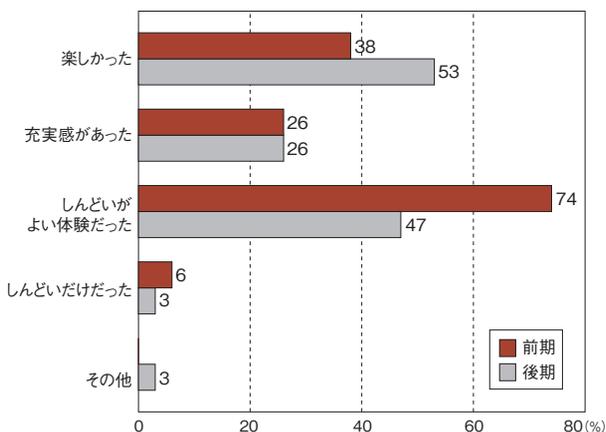
わかりにくい仕事の苦労や喜びを知り、働くうえで大切な態度を多くの生徒が身につけたために、イベントが「楽しかった」とは違う種類の感想をもったと思われる(REPORT参照)。

「生徒はみんな一生懸命。学校を休みがちだったのにインターンシップは休まず通ったという生徒もいて、1年間の継続は大きな自信になったのではないだろうか」(谷口先生)

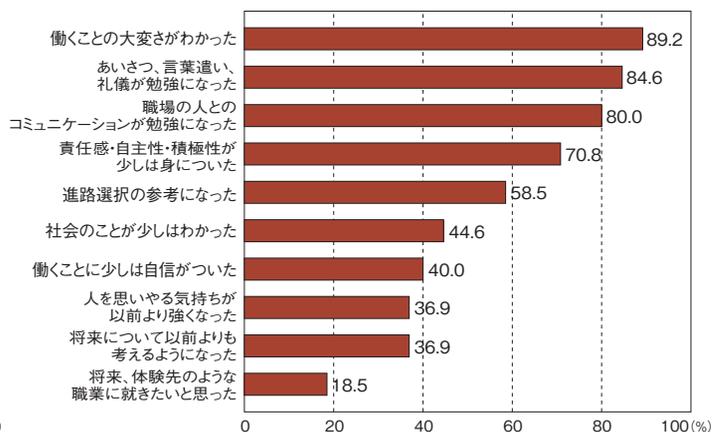
インターンシップ受け入れ先からの感想・意見のなかには、「あいさつはもっと元気に」「注意するが返事のできない生徒さんも」など厳しい意見もある。しかし多くは生徒の頑張りを称える声だ。

図7 インターンシップ体験生徒アンケート結果 (08年度・複数回答)

Q.インターンシップの感想



Q.インターンシップで得たもの





小中高合同奉仕作業で、高校生は小学生をリードしながらゴミ拾いを行った

VOICE

体験先からの意見・感想(抜粋)

【販売】仕事は主に商品整理と品だしをしていただきました。地味で単調な仕事でしたが、商品整理の重要性、必要性は本人にも説明し、日誌にも書きましたので、理解してくれたものと思っています。おとなしいタイプでコツコツと仕事に取り組んでくれました。意欲や積極性は自分の好きなこと、本当にやりたいことに出合った時に出てくることと期待しています。

【販売】インターンシップでお預かりした生徒さんには作業だけでなく人間性や特に社会性を学んでいただきたいと常々考えておりますが、指導不足で申し訳なく思っております。今後もインターンシップでの体験では、仕事の大変さばかりでなく働くおもしろさもわかってくれればと思っています。

【サービス】当初は高校生の就労体験と聞き、血洗いとメンテナンスをやってもえれば…と思っていました。しかし、彼女の仕事に対する姿勢やのみ込みの速さに正直驚きました。毎週金曜日には「Nさんは？」とパートから聞かれるぐらい主力になっていました。助かりました。就労体験を通じて働くことの大変さや喜び、両親に対する感謝を知ってもらえたら私たちもうれしいです。

も、受け入れ先の姿勢や接し方がインターンシップの効果を高めていることがわかる。

Close up ② 小中高連携

12年間の連続した

キャリア教育を目指して

次に、「南牟婁郡キャリア教育推進企画会議」を核とした小中高連携の内容について見てみたい。南牟婁郡は御浜町と紀宝町の2町からなる。同校は郡唯一の高校で、郡内にある2つの小学校、2つの中学校がパートナーだ(図8)。2つの町をまたぐ連携例は全国的にも珍しい。多様な背景をもつ学校間の連携の舵取りは難しそうだが、リーダー役である同校の教員から苦労話は出てこない。

「最初にしっかりと趣旨説明をして枠組みさえ作ってしまえば、意外と難しくないと印象です。むしろ学校間の垣根が取り払われ、日常から情報交換や小さな連携が気軽に行えるやりやすさを感じています」(堀教頭先生)

活動の道筋を立てるのは「推進企画会議」だ。同校を活動拠点として年2回、各校校長および各町教育委員会教育長と県教育委員会進路指導グループの担当者が集まって、全体計画の確認や総括を行っている。また、各校の実務担当者が具体策を話し合う「研究部会」を年4回程度開催。これらの会議を通じて各校の状況や実践内

容が共有され、各校が持ち寄ったアイデアから新しい連携の取り組みが次々と生まれた(図9)。阿田和中学校で行う紀南高校生によるインターンシップ発表会も、この場で中学校から要請されて始まったものだ。

また、5校はキャリア教育に対する理解の状況が異なるため、共通理解をもって進められるように教員研修にも力を入れている。キャリア教育やキャリアアカウンセリングの専門家を招いて合同で講演会を開催したり、県主催のキャリア教育講演会や実践発表会にも積極的に参加するようになった。代表者によるキャリア教育先進校への視察も重ねており、そこで学んだことは5校で共有されている。

昨年度は、5校それぞれの活動をキャリア教育で目指す4つの能力領域にあてはめ、「キャリア教育支援プログラム」表として整理。各学校段階の接続に向けた研究に踏み出した(図10)。

「表にまとめてみると、一連の流れに不足している部分も見えてきました。次はこのようにまだ断片的な取り組みをどうつないで系統だったものにしていくかが課題です」(谷口先生)

Close up ③ 地域への情報発信

学校通信を地域住民に
直接配布し活動をアピール

地域との関係づくりには学校の方針や活動を

「作業だけでなく人間性や社会性を学んでいた
だきたい」「就労体験を通じて働くことの大変さ
や喜び、両親に対する感謝を知ってもらえたら
私たちもうれしい」といったコメントからは、単なる
「お手伝い」と扱うのではなく、育てようという
意識が伝わる(VOICE参照)。

「職場の方には『いろんな話をしてください』と
お願いしています。生徒にとって体験そのものが
学習ですが、そうした職場の方のお話も刺激に
なったり、進路選択の参考になったりしているよ
うです」

そんな進路指導主事の池上亮先生の話から

